



Data

監督: ジェシカ・ハウスナー

出演: エミリー・ビーチャム/ベン・ウィショー/ケリー・フックス/キット・コナー/デヴィッド・ウィルモット/フェニックス・プロサール/セバスティアン・フルーク/リンゼイ・ダンカン

■ショートコメント■

◆「赤く咲くのはケシの花・・・」。かつて藤圭子が歌って大ヒットした『夢は夜ひらく』はそんな歌詞で始まったが、私を含めて、ケシの花を実際に見たことがある人は少ないだろう。しかして、本作のチラシに、本作のヒロインである植物学者のアリス（エミリー・ビーチャム）とその助手クリス（ベン・ウィショー）と共に映る赤く咲く花は、美しいと言えば美しいが、どこか不気味。まるでケシの花のようだ。

劇中に登場する会話によると、アリスが一人息子のジョーにちなんで“リトル・ジョー”と名付けた新種開発中の真紅の花は、ある特殊な効果を持つらしい。つまり、その花はある「一定の条件を守ると、持ち主に幸福をもたらす」というわけだ。

「特別な植物なのよ。」「どう特別な?」「人を幸せにしてくれる。」そんな会話が科学者として適切かどうか、それ自体も疑問だが、尺八と太鼓の音が多用されたバックミュージックの中で、そんな不気味なストーリーが始まっていくことに・・・。

◆チラシによると、本作のストーリーは次のとおりだ。

新種の植物開発に取り組む研究者のアリスは、息子のジョーと暮らすシングルマザー。彼女は、ある特殊な効果を持つ美しい真紅の花の開発に成功した。その花は、ある一定の条件を守ると、持ち主に“幸福をもたらす”というのだ。会社の規定を犯し、アリスは息子への贈り物として花を一鉢自宅に持ち帰り、“リトル・ジョー”と命名する。花が成長するにつれ、息子が奇妙な行動をとり始める。アリスの助手、クリスもリトル・ジョーの花粉を吸い込み、様子がいつもと違う。何かが少しずつおかしくなっていくその違和感は、果たしてこの植物がもたらしたもののなのか・・・。

◆他方、2020年7月17日付日経新聞で中条省平氏（映画評論家）が書いた本作の批評によると、本作の女性監督ジェシカ・ハウスナーは、ウィーンの幻想派絵画の巨匠ルドルフ・

ハウスナーの娘らしい。そのため、彼は「この映画の、静謐な日常の底にひそむとり返しのつかない亀裂と違和感は、たしかに父親の謎めいた絵画に通じるものがある」と思わず膝を打ったらしい。

アリスを演じたエミリー・ビーチャムは、本作の演技で第72回カンヌ国際映画祭で女優賞を受賞したそうだが、さすがカンヌ国際映画祭の受賞者選びは凝っている、と再認識。

◆今や将棋界はまだしも、囲碁界はAIが人間を凌駕する時代に入っているくらいだから、新種の植物開発にAIが活躍するのは当然。しかし、アリスたちの血のにじむような努力の中、万が一けつたいなウィルスが発生し、何らかの異変を引き起こしていたとすれば・・・？導入部で、おとなしい愛犬が少しずつ変化し、獐猛になっていく姿を見ると、思わずゾーっとしてくる。もっとも、このようなゾンビ化(?)なら、人間はそんな変化を誘発するウィルスの危険性にすぐ気づくはずだが、変化は変化でも人間を幸せにする変化をもたらすウィルスなら・・・？

劇中、ジョーとその恋人が、「リトル・ジョーの香りを吸ったことによって幸せになっていく変化は死と同じようなものだ。」「なぜなら、本人はそれに気づかないのだから。」と語る姿をみていると、再度思わずゾー。もっとも、これは、ジョーとその恋人が思いついた冗談だと言われたから、アリスもその場はいったん収まったが、実は・・・。

新型コロナウィルスが世界中に猛威を振るっている昨今、こんな映画は本当に怖い。

◆人間の幸せとはナニ？人間が生きていく意味とはナニ？人間の尊厳とはナニ？そんな哲学的な問いは、アダムとイヴが誕生した後、ずっと人間の頭を支配している。そして、21世紀に入った今、そこにAIが入り込んできているからよけい話はややこしくなっている。しかして、本作ラスト、ジョーの変化も男の子特有の年齢的なもの？

そんな割り切りの中、ジョーは母と息子の2人だけの仲の良い生活から離れ、ジョーが希望した通り、離婚した父親との生活に移行していくが、果たしてこれはホントにジョーだけの選択？それとも「リトル・ジョー」の香りを嗅いだことによる変化？そこがわからないから本作は難しい。将棋や囲碁なら、今は一手ごとにその手の正解度や善手・悪手の確率が表示されるが、さて、人間の幸せ度は誰がどう判定するの？

面白いけど、メチャ後味の悪い映画を鑑賞したことに、感謝と後悔の両者の気持ちがふつふつと・・・。

2020(令和2)年7月27日記